

薬の伝言板

緩和ケアシリーズその1 前編



緩和ケアと薬剤師の役割・痛み止め（鎮痛薬）の使い方

No.330 2025 年 5 月

丸子中央病院 薬局

緩和ケアとは？

「緩和ケア」と聞くと「がんの終末期だけのもの」と思われがちですが、実は 心不全・COPD（慢性閉塞性肺疾患）・神経難病 など、さまざまな病気の方が対象になります。目的は 痛みや苦しさを和らげ、穏やかに過ごせる時間を増やす事です。緩和ケアでは 痛み だけでなく、息苦しさ・倦怠感・不安・便秘 などにも対応が求められ、その中で薬剤師は、患者さんやご家族が安心して薬を使えるようサポートしています。その中で今回は特に「がんの進行が進んだ方の痛みを和らげる薬」について記します。

緩和ケアにおける薬剤師の役割

薬剤師は 病院・在宅・施設 など、さまざまな場所で患者さんを支えています。

●病院での役割

-  医師と連携しながら、適切な薬を選ぶ
-  副作用を防ぐためのアドバイス
-  患者さんやご家族への説明 など

●在宅での役割

-  患者さんやご家族が薬を適切に使えるようサポート
-  貼り薬（貼付剤）や飲み薬（内服薬）、点滴（持続皮下注等）などの使い分けの相談
-  突然の痛みにも備える「レスキュー薬」の使用サポート など



薬剤師が関わることで、安全で効果的に薬を使うことができ、患者さんやご家族の不安に対応します。

痛み止め（鎮痛薬）の使い方

痛みの治療には、WHO 方式の鎮痛ラダー（痛みの強さに応じた段階的な鎮痛薬の使い方）を参考にしています。※オピオイド：オピオイド受容体に作用する薬。麻薬も含み、強い痛み止めの総称です

● 第1段階（軽い痛み）

→ 非オピオイド鎮痛薬（アセトアミノフェン、ロキソプロフェンなど）

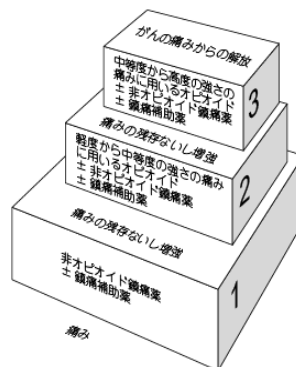
● 第2段階（中等度の痛み）

→ 弱オピオイド（トラマドールなど）+ 第1段階の薬

● 第3段階（強い痛み）

→ 強オピオイド（モルヒネ、オキシコドン、フェンタニルなど）

※以前は 1→2→3 と段階的使用が推奨されていましたが、現在は症状次第で3段階から開始する事もあり、あくまで参考となっています。



WHO 鎮痛ラダー

鎮痛薬の分類と特徴

分類	主な薬剤	特徴
● 非オピオイド鎮痛薬	アセトアミノフェン ロキソプロフェン セレコキシブ など	軽度の痛みに使用、胃腸障害や腎機能への影響に注意
● 弱オピオイド	トラマドール コデイン など	中等度の痛みに使用、副作用（便秘・吐き気）あり
● 強オピオイド	モルヒネ、オキシコドン、 フェンタニル など	強い痛みに使用、適切な管理が重要



オピオイドを増量すれば痛みがすべて取れるわけではなく、**痛みの性質に応じた薬の使い分けが重要**です。例えば、

- 骨転移痛などの体動時痛（動いた時の痛み）にはロキソプロフェンなどが有効
- 神経障害性疼痛には強オピオイドだけでは効果が不十分な場合がある
- 内臓痛（内臓からくる重いズーンとした痛み）にはオピオイドが他より効果的 など

痛みの種類を見極め、適切な薬を組み合わせることで、より良い鎮痛を目指します。薬剤師は**患者さんの痛みの状態を細かく観察し、医師と相談しながら適切な処方提案する役割**を担っています。

オピオイドの使い方のポイント

- **痛みを我慢せずに使う**
（痛みを我慢せず鎮痛させ QOL（生活の質）を上げることが重視されます）
- **副作用（便秘・吐き気など）は対策できる薬剤で対応**
（下剤や吐き気止めを使う）
- **レスキュー薬を準備する**
（痛みが急に強くなったときに使う薬）

これらを意識し準備することで、痛みと副作用をしっかりコントロールできます。

まとめ



「痛みを我慢するのではなく、適切に薬を使うことで快適に過ごすこと」
緩和ケアでは、**患者さんのつらさを軽減することが一番大切**です。薬剤師が関わることで、副作用を抑えながら効果的に薬を使うことができ、患者さんやご家族の負担を減らすお手伝いができます。
来月後編は「**薬の副作用（主にオピオイド）とその対策**」についてお伝えします。

文責 薬局 酒井